

天文学とプラネタリウム

第112回



今月のお題

「研究の現場そのまま」の迫力



研究と研究者の真の姿を伝えるには、その現場を中継するのが一番。
あなたはどんな現場を見てみたいですか？



www.tenpla.net

高梨直統 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

夏休みもイベント盛りだくさん！

「天文学者って毎日望遠鏡のぞいて新しい星探してるんでしょ？」よく言われます。でも、違います。本紙の読者の皆さんならご存知かもしれませんが、今やプロの天文学者で毎日望遠鏡をのぞいている人はごくごく少数。望遠鏡に取り付けられた多種多様な観測装置が記録したデータを解析するためにコンピュータのディスプレイとにらめっこしていたり、観測に使う装置を自分たちで開発したり、望遠鏡の運用のために力を尽くしたり、また学生の教育をしたりと、その仕事ぶりは「天文学者」という言葉から想起されるものよりもずっと多様です。では、どうしたら実際の姿が伝わるか？天文学者をモデルにしたドラマでも流行ればいいのかもかもしれませんが、物理学者ですらドラマの中では殺人事件の謎を解かなくてはいけないこのご時世、ドラマで真の研究者の姿を伝えるのは難しそうです。

天文学をやっている学生がプラネタリウムと一緒に天文学の普及活動をしよう、というのが10年前に「天ブラ」を始めた時の方針。そこには、研究の現場にいるフレッシュな学生が人前に出

ていってリアルな話をする、という狙いもありました。ハワイやチリといった僻地の天文台での体験記、「この謎を明らかにしたい、のだけれどもなかなか難しくて」という偽らざる言葉と表情。講演会やサイエンスカフェでそうした生身の研究者に触れることは、世間に流布されたイメージとは一味違う本当の研究者の姿を伝えるのには有効です。

しかしそういう場合は、あくまでも研究の現場とは違います。せっかくなら、研究の現場をのぞいてもらって、今そこで営まれている研究の足取りを見てもらいたい。そんなことを思っていました。海洋研究開発機構 JAMSTEC。有人潜水艇「しんかい 6500」や掘削船「ちきゅう」を擁する JAMSTEC が、「しんかい 6500」による海面下 5000m での大西洋底潜航調査をネットで生中継したのです。うーん、やられたか。

研究者が狭い耐圧殻内での母船と通信をする姿、船外に付けられたカメラにうつすらと映る熱水噴出孔、それにじわじわと近づいていく様子、びっしり張り付いた大量のエビ、冷静に時に興奮しながら調査を進める研究者。ときおり



アルマ望遠鏡コントロールルーム。国際色豊かなプロジェクトの現場をお届けするのも面白さの一つ。

の通信遅延や光ファイバーの破断など臨場感をおもえるトラブルもあり、まさに現場の様子がリアルタイムで届けられました。深夜の中継にもかかわらず延べ視聴者数は 35 万。これは凄いインパクト。

筆者平松が仕事をしているアルマ望遠鏡でもこんなことをやってみたいのですが、残念ながら電波干渉計ではリアルタイムに天体画像を合成できないこと。「わー、見えてきた！」といえるのが観測の数日後というタイムラグがあるのです。とはいえ、現場の雰囲気伝えるのは大切なこと。いつか実現したいと思います。